

## 〔抄 録〕

## 種馬鈴しよの小さいも生産に関する試験

(知作部会) 藤山俊計・相川英雄

(長崎県総合農林センター)

馬鈴しよ栽培の機械化にともない、種いもとして30g前後のいもの要求が予想されるので、当センターで行なつた小さいも生産に関する試験成績を取りまとめ参考に供したい。

畦巾を61cmとし、株間を12cm, 18cm, 26cm, 30cmにした昭和30年の試験では61cm×26cmに較べ12cm区は大いも129%, 中いも129%, 小さいも220%, 18cm区では大いも130%, 中いも113%, 小さいも88%. 30cm区では大いも163%, 中いも74%, 小さいも68%であつた。また、畦巾と株間を一定にし、1カ所に種いもを1, 2, 4個と植付けた昭和40, 41年の試験の結果では、1株植に較べ、2株植は大いも44%中いも200%, 小さいも193%, 4株植では大いも24%, 中いも227%, 小さいも427%であつた。なお、この他の密植、株植の試験結果も同じ傾向であり、小さいも生産の方法として期待出来る。

## カイヨウ病の生態的研究(予報)

(病虫害部会) 温州ミカンについて

太田 孝彦

長崎県総合農林センター果樹部

41年の発生消長は8月上旬から下旬まで発病が停止し9月になって再び増加している。気温は平年並かやや高め、雨量は少く、特に7月中旬から8月中旬にかけてほとんど雨が降らなかつた。このことから発病には降雨が不可欠であることが分る。

各新梢の葉の位置と発病は時間とともに先端へ発病していきが下位の葉もまた硬化後かなりの期間病斑数が増加していく。

以前の病斑の位置(新梢に対して30cm以内)と新梢の発病との関係は病斑が新梢に対して上に存るとき最も新梢の発病に影響を与え、横に存るときはそれに次ぎ、下に存るときはわずかに発病するが周囲に病斑をもたない新梢の発病程度と大差はない。

## 土壤条件と馬鈴しよの品質に関する解析的研究

(土壤肥料部会)

(第2報) 土壤の種類と形態別窒素含量について

高木陸夫・小野末太

長崎県総合農林センター

馬鈴しよは今後収量のみならず品質が重要視されると思われるので、粘土質(口ノ津), 壤質(有家), 砂質(南有馬)および火山灰を含む軽しよう質(瑞穂)の地帯における形態別窒素含量について報告する。

収量は有家, 瑞穂では250kg~280kg/aの安定多収であつたが、口ノ津, 南有馬では180kg~140kg/aで低収量であつた。

窒素の形態別では口ノ津においては40年春作を除くと全N, 粗蛋白, 純蛋白, アミノ態N含量は多い。南有馬においては40年春作では粗蛋白, アミノ態N, NH<sub>3</sub>-Nはやや多く、秋作では農1が39年では粗蛋白純蛋白, アミノ態Nがやや多く、40年では粗蛋白, NH<sub>3</sub>-Nがやや多い。有家においては春作では明らかに粗蛋白, 水溶性蛋白, アミノ態Nは多いが、秋作では39年は農1が粗蛋白, 水溶性蛋白, アミノ態Nは多く、40年度はチヂワが粗蛋白, アミノ態Nが多い。瑞穂においてはNの形態別含量はやや少ないが、39年秋のチヂワでは粗蛋白, 純蛋白はやや多い。

## テツポウユリ促成栽培における

日長と温度の影響

(園芸部会) 鈴木基夫・田村輝夫・森田治雄

園芸試験場久留米支場

テツポウユリの品種特性と栽培環境との間の関係を知るため、促成栽培時の日長、温度の影響について36年以來調査をしてきたが、40年は日長は9, 16時間、温度は夜間最低15, 20°Cとし、10品種と1系統、各区10球、13°C10日、8°C40日間の低温処理を行ない、11月4日に15cm鉢に1球ずつ植えこみ、ただちに各温度日長の下での栽培を行なつた。

その結果を品種、日長、温度について分析したとこ

ろ、開花所要日数、発らい日、着らい数、茎長、葉長とも温度による影響が最も大きく品種の影響以上となった。葉数は日長、温度の影響はうけず品種の差のみあらわれた。開花所要日数、発らい日、着らい数、葉数は日長の影響もうけるが温度ほどではない。開花所要日数には日長と品種間に相互作用が見られた。

### シヨウガの生態に関する研究

(第1報) (園芸部会)

\* 川田 計・久田松弘重  
長崎県総合農林センター

シヨウガの生育相を追跡して肥培管理の基礎資料をえようとした。供試品種はおおしょうが(600kg/10a)を用い、4月16日、畦巾60cm、株間30cmに植付けた。施肥基準はN22.5, P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>18.75, K<sub>2</sub>O22.5kg/10aとし、

植付3ヵ月後から15日毎に標本を採取し、地上部、地下部の生長量を測定した。

茎数、草丈の増加は9月中旬までにはほぼ止つたが、葉茎重、塊茎重の増加は10月下旬まで続き、以後は停止状態を示した。乾物重はこの後も増加し続け、とくに新塊茎にその傾向が強くと表われていた。新塊茎の肥大は7月下旬頃種塊茎の太さに達し、8月下旬で約3倍、9月下旬～10月中旬頃で約7倍、収穫期の10月下旬には8～9倍に達した。

葉茎重と新塊茎重の間には $r = +0.997$ の極めて高い相関関係が認められ、地上部の繁茂の重要性を示していた。また種塊茎重と新塊茎重の間にもきわめて高い相関関係が認められたが、その肥大率は小塊茎が高くなっていた。

~~~~~  
\*現大分県温泉熱利用農業研究所